

しぶしじょうあと 国指定史跡 志布志城跡

1. 志布志城とは

内城、松尾城、高城、新城の4つの山城をあわせて「志布志城」と呼びます。山城とは、山や丘など防御に有利な地形に造られた「とりで」のような城です。山や丘を切り盛りしてつくられていて、天守閣のような高い建物はありません。山城に対して、平地に造られ堀や天守閣を持つ政治の中心となった城を平城と呼びます。



内城の復元模型（館内展示）

山城は戦いのときに立てこもるための城でしたので、城主は戦いのとき以外は城の外で生活していました。

2. 志布志城の年代

志布志城は中世の山城です。中世とは、平安時代末から戦国時代末までを指し、西暦1192年頃から1573年頃までを言います。志布志城の築城年は不明ですが、1336年には存在が記録に残されています。江戸時代に入った1615年頃には、軍事拠点としての役割を失い、山城としては使用されなくなったようです。展示してある模型は、1574年の様子を想定して復元したものです。

3. 志布志城の城主

- 1) 築城以前？ (志布志の領主) 救仁院氏、千種氏
- 2) 1336年 肝付氏 「1336年、志布志城の肝付氏が重久氏に攻められる」
- 3) 1338～1357年 楡井氏 南朝方。松尾城を拠点に戦うが、敗れる。
畠山氏 北朝方。楡井氏を破り、一時、内城に居城。
- 4) 1357～1538年 新納氏 島津氏の分家。畠山氏に代わり志布志を約180年に渡り治めた。
- 5) 1538～1562年 豊州家島津氏 島津氏の分家。飢肥、櫛間(串間)も領有。
- 6) 1562～1576年 肝付氏 日向の伊東氏と協力して島津氏に対抗するが、後に服従。
- 7) 1577年～ 島津氏 日向・大隅を平定。志布志には地頭(代官)の鎌田氏を配置。

4. 志布志城の規模

志布志城の中心的な役割を果たした内城の規模は、山城部分だけで南北約500m、東西約250m、面積約97,000㎡になります。内城の本丸の標高は約54mで、麓との比高差は約50mになります。平地の武家屋敷等を含めると城の範囲は大きくなり、志布志城全体の城域は、広大なものであったと考えられます。

5. 海を越えてもたらされたもの

志布志城の発掘調査によって、国内外の交易を示す、次のような遺物が出土しています。

- 1) 海外磁器：青磁、白磁、青花(染付)、赤絵、瑠璃釉（中国～中国南部地域）
- 2) 海外陶器：陶器、華南三彩※（中国～中国南部地域、タイ、ベトナム？）
- 3) 国内陶器：備前焼(岡山県)、常滑焼(愛知県)、瀬戸焼・美濃焼(愛知県)、渥美焼(愛知県)、唐津焼(佐賀県)、楽焼？(京都府？)
- 4) 土師器：京都系土師器※
- 5) 銭貨：洪武通寶(明1368年)、永楽通寶(明1408年)ほか、中国の銭
朝鮮通寶(朝鮮1425年頃)、大世通寶(琉球1454年頃)

華南三彩とは、現在の広東省周辺で作られた色づけされた陶器です。志布志城で出土したものは明時代(1368～1644年)のもので、碗や皿のほか、鳥の形の水差しや魚の形の水差しが見つっています。鳥や魚の形をした芸術性の高い製品は貴重であり、鹿児島県での出土例は少ないものです。

京都系土師器とは、室町幕府のあった京都周辺で生産され、使用されていた土師器に類似するものを指します。京都以外の各地方で出土するものは、その地方と京都との関係を反映するものとして注目されます。大分市の大友氏、山口市の大内氏に関係する遺跡から、出土が確認されています。鹿児島県での出土は、現在のところ志布志城のみです。

これらの遺物は、港を通じて、海を越えて運ばれてきました。志布志の港は、国内のみならずアジアの各地とつながった国際的な貿易港でした。貿易で利益をあげ、海上輸送で兵員や物資を速く大量に運べる港は、経済的・軍事的に重要な場所でした。志布志城の城主が次々と変わった理由は、この港の重要性からでした。

6. 志布志城の位置

内城は、志布志小学校の裏山にあたります。当時、小学校の場所には城主の館があり、平時は館で事務を行い、敵が攻めてくると山城にたてこもって戦いました。

内城は史跡公園として公開されています。雨のあとは避けて、山歩きしやすい服装で登ってください。害虫対策も忘れずに。現在は草木に覆われた静かなたたずまいのなかに、往時のサムライたちの息づかいを感じることができるかもしれません。

